

特別公開

航空事故調査に 欠かせない必須アイテム

事故はいつ、どんな場所で発生するか予測不可能！当然ながら、事故調査官が向かう現場は、美にさまざまです。特に航空事故の場合、山岳地帯などアクセスが困難な場所や、現場が広範囲にわたることもしばしば。そこで今回は、航空事故調査官が現場に出動する際に必ず持つて行く必須アイテムを紹介します。



- ① GPS装置：GPS情報を使って、自分のいる位置や調査対象の位置を高精度に測定・記録できる ②レーザー距離計：離れた場所の対象物の距離や角度を測定。GPSとの連動機能を備えているので、測定したデータを緯度・経度の位置情報と組み合わせることも可能 ③デジタルカメラ：GPS機能を搭載しているため、撮影場所などの記録も可能 ④懐中電灯：暗いところや夜間では必需品です ⑤マグネット（方位磁石）：調査現場で方向を知るために使います ⑥ルーペ：小さな破片や手がかりとなるものを拡大 ⑦メジャー：距離を測ったり、物の寸法を測るのも重要です ⑧鏡：柄は伸縮自在。狭いところや裏側もこれで見ることができます ⑨ICレコーダー：関係者へのインタビュー記録などに使用 ⑩腕章：現場は、消防、救急、警察など多くの人が活動。運輸安全委員会の事故調査官であることを周囲に示す大事なサインです ⑪救急セット：さまざまな障害物のある事故現場。思わぬ怪我にも対応できるように常に携帯

航空事故調査の効率を大きくアップさせたGPS

GPSが登場するまで、位置記録はメジャーとマグネット（方位磁石）を使用して測っていましたが、GPSによって、より迅速で精度の高い事故分析が可能になりました。墜落事故の場合は、機体がぶつかった場所をすべて記録していくことで、墜落までの軌跡をたどることができます。また広い範囲に散らばった破片の位置を記録して分析することで、どの方向に力が動き、どのように飛散したかといったことも明らかにできます。

山奥の墜落現場に向かうためにはトレッキングシューズも重要アイテム

航空事故調査官には本格的な登山用トレッキングシューズも支給されています。現場によっては、現地の救助隊や警察に同行して山奥まで分け入ることも珍しくありません。登山の専門家たちに遅れずついて行くために、普段からオフィスでもエレベーターを使わずに階段を昇り降りして基礎体力をつけている事故調査官もいるそうです。



現場調査後はフライトレコーダーを解析し“事実”を解明



データを解析する向調査官

大型航空機には、機体の姿勢や動きなど飛行中の情報を記録するFDR（フライト データ レコーダー）と、コックピット内の音声や通信を録音するCVR（コックピット ボイス レコーダー：右下写真）の搭載が義務づけられています。耐熱、耐衝撃構造のカプセルに収められたICチップには、最大で約1,000種類の飛行情報と約2時間の音声記録が記録され、万が一の場合には、これらのデータを取り出して解析し事故原因を究明します。“事実”を正確に知るために、データには非常に高い信頼性が求められ、1機のFDRデータを2台の解析装置で検証して、整合性を確認します。



通称ブラックボックスと呼ばれるフライトレコーダー。実はどんな現場でも見つけれやすいよう鮮やかなオレンジ色。